

植物のふしぎ(III)

もと少年の素朴な素朴な疑問

目黒修治

もと少年はホントに少年の頃からすごくふしぎに思っていたことが沢山あります。その中には、今でもさっぱりわけの分からないものと、なんとなく自分で納得してしまったもの等いろいろですが、心あたりのある方はどなたか教えて頂けると大変うれしいと思います。いくつか書いてみましょう。

Q.その1

タンポポでもススキでもおおよそ雑草と呼ばれるようなものは老眼のじいちゃんばあちゃんにはほとんど見えない様な小さい種子を沢山つけます。何十万も何百万もの種子をつけるのに、ススキの種子からは必ずススキの芽が育つ。これが何ともふしぎでありました。数え切れないほどの数の種子の中には1つや2つは間違っ、キュウリの種子からナスが出てきても良いんじゃないか。いや沢山あれば間違いがあるのが自然というものだ。人間だって多数集れば、必ず一人や二人はおかしいのがあるではないか。なんで植物は絶対に間違わないのだろう。大学2年の頃まで、まじめに悩んでいました。でも昨今は、年をとってせいで、植物達に間違いを期待することをあきらめてしまったようです。

Q.その2

田舎の夏、少年は腹がすいたのでおやつ代わりになるものを求めて畑の方へ歩いて行きました。キュウリの黄色い花にハチが止ってゴソゴソと蜜(たぶん)を吸っていました。その時の光景が今でもハッキリと思

い出されます。

花の中には虫媒花と言われるものも多いようです。自分自身が受粉するために、虫の好きな蜜を提供し、虫を呼び集め、虫の採餌行動によって受粉する植物達。なぜ、どうして虫媒花達は虫が蜜を好きだという事を知っているんだろう。どうして虫の好みがわかるんだろう。人間同志では、言葉が通じないだけでコミュニケーションが満足に成立しないのに、虫(動物)と草花(植物)との間で絶妙な連携プレーが成り立つのか、ハッキリ言ってまかふしぎ。あなたはそう思いませんか?

Q.その3

植物の中には『食虫植物』と呼ばれるものがあります。環境条件が非常に悪く、土壤中に養分が少ない場所で生きてゆくため、昆虫達をさそい集め、獲えて消化し、自分(植物自身)が生育するための栄養にすると言う。植物が動物を食べる!植物連鎖の常識からすると、植物は生産者であり、動物が消費者であるはず。生産者である植物が消費者を消費するとは!でもまあ、ここまでは百歩譲って納得するとして、それ以上に納得できないのは、植物達が自分の栄養不足を補うために昆虫類をつかまえて食べるという能力——たとえばハエトリソウの様なトラップの運動機能とか、ウツボカズラのように消化液のつぼを持つとか、etc——をどの様にして身につけたのだろうか。これが最大の疑問なのです。同時に昆虫達を自分の栄養源として認

識できたのは何ゆえか、ウーンこれも大いに疑問だなあ。

Q.その4

食虫植物もビックリギョウテンだけど、植物の中に沈水植物というのがあります。フサモとかキンギョモとか。水の中にもぐったまま生きている——つまり、水中で呼吸のできる不思議な植物達だ。

地上の植物が肺呼吸ならば、えら呼吸のできるやつ、とでも言うのだろうか。でもキンギョモやフサモなどは地上に出して植木鉢の中に植えてもたぶん枯れてしまうだろうから、もともと水中呼吸の能力を持っている魚のような植物という事で、ま一応納得できることにするが、極めつけはシケシダなのだ。

こけがとんでもない怪物で、地上でも水中でもちゃんと生きられるという不思議な植物。少し湿っぽい所に生えている、たいして珍しくもないシダであるが、1年の内の約200日間も水深20mの深さに沈んでいても、水位が下がるとちゃんと淡緑色の葉を広げる。そして、何事もなかった様に平気で生育しているのですよ。

岩船郡関川村の大石ダム湖岸で毎年見られるシケシダの生命力!どうしてだろう?見る度に頭が下がります。興味のある人は一度見てみるといいですよ。もしかすると人生観が変わるかもしれませんから。

(株・グリーンシグマ)